

R3. 3. 15 アドバイザリーボード委員からの主な意見

議 題	委員名	意 見
<p>○ 今後、乳幼児教育支援センターに期待されることについて</p>	<p>秋田委員</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 今後の乳幼児教育支援センターの最も大きな役割は、幼児教育アドバイザー訪問事業や園・所への研修を生かすことにより、幼児教育・保育のネットワークをいかに市町の中でうまく作り出していけるかということだ。 ・ 幼児教育アドバイザー訪問事業の効果を見える化して市町に配付することができるかというし、訪問した園・所を中核として、ミドルリーダーが参画しながら質の向上が図られていくかというと思う。 ・ 国際的な動向としては、保育の質を上げるには、特に現職に対する研修が最も直接的な影響を与えるという知見が出てきているので、その辺りを検討されるかという。 ・ 幼児教育アドバイザーについて、もっと良くするためにどうすればいいかが見える化でき、研修についても、意味があるということは何らかの形で保育者自身が実感し、また、そういう研修が園・所内だけではなく、家庭に対してもどう影響していくのかというようなことが、ドキュメンテーション等で見えていくかというと思う。 ・ 絵本の蔵書数が少ない園・所ほど近隣の図書館から団体貸出を受け、きちんと蔵書数を補っているという部分があることが分かってきており、乳幼児教育支援センターだけでなく、地域の図書館等、子供の様々な文化活動を支援する機関が、いろいろなネットワークを作っていくかというのではないかと思う。 <p style="text-align: center;">園所によって蔵書数にかなり差があるので、それをどうやって補ってい</p>

議 題	委員名	意 見
○ 今後、乳幼児教育支援センターに期待されることについて		くかが重要であり、公共図書館と園・所の物流・交流が図られるといいと思う。
	朝倉委員	<ul style="list-style-type: none"> ・ 幼保小連携・接続について、園・所、学校、地域において一定程度進んでいる地域においては、コロナ禍においても更に推進され、大きな成果が得られていると思うが、一方で、まだこれからという地域においては、なかなか推進していくのが難しい状況が生じたことも現実の問題としてあると思う。その意味で、地域によって格差や違いが広がってきているかもしれない。 その点を考えると、引き続き、幼保小連携・接続を推進し、どのようにして広げていくのかに期待したい。 ・ 一人一人の保護者や保育者がこんなことを不安に思っている、こんなことに困っているという時に、そこをどうしたらいいのかという相談窓口が、どこかに必要ではないか。 この窓口は様々なところとつながっていないとワンストップにならないので、そういう体制を整えることが、いろいろと大事なことにつながっていく基盤になるのではないかと思う。
	今井委員	<ul style="list-style-type: none"> ・ お金の数え方等から身に付く数の概念やアナログ時計の1時間から身に付く60進法の考え方といったことは、やはり小学校の算数の時間に学ぶというよりは、その感覚をぜひ幼児期に身に付けてほしいと思うが、ではそれを園・所で教えればいいのかというと、そこは小学校の算数の前倒しをするのではなく、やはり生活体験の中でやってほしいと思う。 子供が小学校に行った時に備えて、こういうことを少し準備しておくた

議 題	委員名	意 見
○ 今後、乳幼児教育支援センターに期待されることについて		<p>めに、「こういう遊びの中にこういう活動を入れましょう」というような踏み込んだ提案を、研修の中でぜひしていただきたい。</p> <ul style="list-style-type: none"> デジタルの有効な使い方というものは、一般の方にはなかなか分からないと思われるので、そういった点についてもエビデンスを持って「こういうふうに使いましょう」といったような、そんな研修等もしていただきたい。
	内田委員	<ul style="list-style-type: none"> 保育記録を活用し、形成評価をしながら保育の質を高めるような取組を徹底してほしい。 広島県内でも取組に地域差があるようなので、市町教育委員会と連携しながら幼児教育アドバイザー訪問事業を展開させてほしい。これまで4年間進めてきた「遊び 学び 育つひろしまっ子！」推進プランというものをとにかく徹底して、全市町と連携しながら進めてほしい。 幼児教育アドバイザーのアセスメント情報としての保育記録を活用して保育・教育のPDCAサイクルを循環させるために、具体的で適切、妥当なアドバイスができる幼児教育アドバイザーの発掘と養成、研修の仕組みを定常化してほしい。 保護者がボランティアの子育て応援隊となり、保育補助者として園・所の保育を手伝うことにより、子供の生活している現場に入っていけるような仕組みを、試験的に導入されてみてはどうか。
	小田委員	<ul style="list-style-type: none"> 幼児教育の世界では、一人一人が違っていることが許されることが重要であるという、教育における平等が求められている。そのために、今、生活の全てが日々変化している状況の中で、子供たちの生き方に関する専門

議 題	委員名	意 見
○ 今後、乳幼児教育支援センターに期待されることについて		性を持つことが保育者や教師に求められているのではないか。「子ども学」の構築というものが急がれているのかもしれない。
	高月委員	<ul style="list-style-type: none"> 「保育の出発は子どもの姿から」＝「カリキュラムの出発も子どもの姿から」を基本として、乳幼児教育支援センターでまとめられた『遊び 学び 育つひろしまっ子！』の実現に向けたカリキュラム開発ブック」活用しながら、幼児教育アドバイザー等による保育現場への助言、指導に期待したい。
	利島委員	<ul style="list-style-type: none"> ホームページで、行政システムとしての乳幼児教育支援センターの位置づけを明確に図式化したものを示した方がいいのではないか。 もう少しいろいろな乳幼児に関するデータを乳幼児教育支援センターに集めていただき、行政がワンストップでうまく機能するようにしていただきたい。その意味で、乳幼児教育支援センター設置から3年を経過するので、それをチェックし評価する義務もあるように思う。 保育者のいろいろな悩みを相談する窓口のようなものも、乳幼児教育支援センターの中にある必要があるのではないか。 (デジタル技術のような)最近の文明のあり方や子供に与える(デジタル機器のような)文化財の問題についても考えていかないといけない。そういう情報を集めて提供するのも行政のすべきことだと思う。
	七木田委員	<ul style="list-style-type: none"> 幼児教育アドバイザー訪問事業以外の事業についても、エビデンスに基づきながら評価検証、見える化して行ってほしい。研修への評価についても、参加者が増えたということだけでなく、その中身について、研修に参加してどのような変化があったかといったところまで入り込んだ評価が

議 題	委員名	意 見
<p>○ 今後、乳幼児教育支援センターに期待されることについて</p>		<p>できないか。また、保育ソーシャルワーカーについても、利用率が上がったということだけでなく、ぜひ中身についても、このような形で効果があったところを見える化してほしいと思う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 文部科学省等の後押しを得ながら、各県の幼児教育センターの協議会のようなものを作って、一緒に協議していったらどうか。 ・ 当初、乳幼児教育支援センターは、ネウボラを含め全庁体制で取り組むという案を持たれていたのではないと思うが、やはり教育・保育に偏ってきている気がする。今後は、やはり全庁体制ということで、健康福祉局との関係性のようなところを、もう一度見直していただく必要があるのではないと思う。 ・ アドバイザリーボードの際に、各市町がそれぞれの幼児教育・保育の振興について説明する機会を作ることにより、市町に刺激を与えることも必要ではないかと思う。
	橋本委員	<ul style="list-style-type: none"> ・ ドキュメンテーションにも外向けのもの、保護者向けのもの、そして、園・所に残すものといくつか種類があり、それぞれ書き方が違うので、書き方を整理されて、いくつかの種類を書き上げられる力を育成していただければいいと思う。 ・ 『遊び 学び 育つひろしまっ子!』教育・保育実践事例集』に記載されている5つの力の育ちの視点について、保育現場で活用してもらえる仕組みを作るべきだと思う。 ・ 子供がはいはいできればいいとか、立って歩ければいいとかいうものではなく、そこに至るまでのいくつかの発達の姿をしっかりと捉えて、積み

議 題	委員名	意 見
○ 今後、乳幼児教育支援センターに期待されることについて		<p>上げていくという視点が、幼児以上には求められるということをしっかりフォローしていただきたい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 連続性を持ったテーマ活動として、保育の質、活動の質を高めていく展開力が保育者に問われているが、次の実践事例集編集の際には、連続性のある活動の展開を扱ってほしい。 ・ 家庭教育支援について、コロナ禍においてもウェブを利用した交流を試みている事例は多いと思われ、普段出かけられなかった人たちが交流できるようになったので、対面での活動ができるようになってからも、そういった支援は続けていってほしい。
	日高委員	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教育の質の保障としてドキュメンテーションによる取組を進めるためには、やはり業務量の問題があるので、保育者でなくともできるようなことを、学生や地域の方、保護者が一緒に取り組んでくれれば、もしかしたら業務量が減るのかもしれない。また、ICTをどのように活用、導入したらいいか、その工夫等を発信したり、経済的な支援というのもあるかもしれない。 ・ 人材育成については、対面、オンラインを併用した研修のシステムというのは、今後、重要だと思っている。 ・ 幼児教育も、今後ますますエビデンスが求められていくと感じており、そういった研究や海外の事例、あるいは自分たちの研究をまとめたり伝えていけたりするような人材、大学院レベルの保育士や教諭の育成に関する啓発と助成を続けてほしいと思う。 ・ コロナ禍においても、家庭内のぎくしゃくした関係が露呈されたり、D

議 題	委員名	意 見
○ 今後、乳幼児教育支援センターに期待されることについて		<p>Vによる孤立化の問題はあるので、そのような家庭をどう救っていくのか、どう見つけていくのかといった場合に、やはり連携を強化することが大事だと思うので、県がしている仕組みづくり、市町がやっていける仕組みづくりが継続されていくといいと思う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 性教育には発達段階に応じた教え、内容があって、その基盤は人権教育から始まっており、包括的性教育として、ぜひ、人を大事にする、自分の体も大事にする、相手の体も大事にするということを、保育者もそうだし、保護者も学んでいくということが大事だと思う。
	無藤委員	<ul style="list-style-type: none"> ・ 乳幼児教育支援センターの取組が進むためには、各園・所にも開かれた態度、つまり、外部の視点を取り入れることに前向きになり、対話していくことが必要だと思う。その上で、園・所にとって、乳幼児教育支援センターは非常に重要な支援のセンターになり得るということを明確にすることと、全ての幼児教育・保育施設が対象として参加できるということが第一目標である。 ・ いろいろな研修を現在実施されているので、それらを体系化しながら整理し、連関を図ったり、リモートと集合の組合せを考えたりする。幼児教育アドバイザー訪問事業については、アドバイザーはファシリテーターであるということ、つまり、その園・所の理想の下での質の向上が中心にあるべきで、その上で、より具体的な助言が必要であればするという事だと思う。また、並行して、公開保育や自己評価を促すことについて、特に公開保育は私立幼稚園では既に動いているが、保育所も含めて広げてほしい。

議 題	委員名	意 見
<p>○ 今後、乳幼児教育支援センターに期待されることについて</p>		<ul style="list-style-type: none"> ・ 地域ごとの保育リーダーを育てていくということで、具体的には、記録の取り方、教材実践例等、保育実践に関わるノウハウややり方の提案など様々なことを、乳幼児教育支援センターを介して広げていくことが必要だと思う。 ・ 乳幼児教育支援センター全体の助言者としてのスーパーバイザーというものが必要だろう。幼児教育アドバイザーに関する研修をしたり、助言したりする役として乳幼児教育支援センターの職員、指導主事等がいると思うが、それに対する外部のスーパーバイザーというのが、常勤でなくとも頻繁に関わる人を設置できるといい。